
シンの旅日記

真逆@妖介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンの旅日記

【Nコード】

N9791N

【作者名】

真逆@妖介

【あらすじ】

私の名前はシン訳があって生まれた国を捨て放浪の旅をしている、今までどれだけの国を回ってきたのかは覚えていない、これらどんな国を回っていくのかも分からない、しかし私はそれでも旅をする何かを求めて。

（前書き）

皆さん始めまして、私の名前は真逆@妖介といます。

今回初めて作品を投稿いたしました。今回は「キノの旅」を元に主人公や登場人物をオリジナルで考え出したものです。

ご意見感想アドバイス等は歓迎です。この作品をきっかけにどんどん書いていこうと思いますのでどうぞよろしくお願いします。

前書きはこの程度といたしましてどうぞお楽しみください。

小さくて大きい国

私の名前はシン、訳あって生まれた国を飛び出し今は放浪の旅をしている。いつも黒い上下おそろいのジャケットとパンツ、その上からは膝まである紺色のフード付きのコートを着ている。

今までどれだけの国を回ったのかは覚えていない、国から国へこのバイクとサイドカーに乗せている人の言葉を話す妖刀（魔の者の呪いを受けた刀）「妖斬^{ようせん}」と行動を共にしている。

さて、前の国から土がしつかりと固められた道を三日と半日ほど走った頃に大きな外壁の小さな国を見つけた。

「国の大きさとまるで比例してない外壁だね……」

サイドカーからの声に賛成に意を込めてうなずいた。

「でも国の中ではそれを口にするな、機嫌を損ねたら面倒だ。」

言い聞かせるように少しゆっくりとした口調で刀に話しかけた。

第三者として見ればただの変人であるがもうそんな目線には慣れている。

この国の入国審査はかなり簡単で出身国を聞かただけだった。

「おまたせ」

「早かったね」

いつもなら最低でも10分は待たされている妖斬も機嫌が良いようだ。

「意外と簡単な審査だった、外壁のわりにはね」

「ますます比例してない国だね」

「頼むから国の中では言わないでくれよ」

「……お互いにね」

「……ああ」

ゆっくりと開く錆びた鉄の塊は耳に残る嫌な音を出しながらバイ

クが通れるギリギリで止まり、少し急ぎながらバイクを押して門をくぐった。

入ってすぐにきれいに舗装された石畳の道路が目に入る、そして通りに沿って並ぶ様々な店のとその看板がこの国の建築技術を物語る。

「綺麗なところだね」

景色にあまり興味の無い妖斬が自分から感想を言うとは思わなかったが私もその感想にまたしても賛成だ、町自体が芸術の様になっているが、この国は何かがおかしい気がする。

「景色も良いけどまずは宿屋だな……え」と

あたりを見渡しながら宿屋を探したがよく見ればどの店も閉まっている。

誰かに道を聞こうにも車や馬車はおろかこの綺麗な道を歩く人は誰一人としていない。

「どうもおかしいな、この国」

バイクの低いエンジン音を響かせながら妖斬に話しかけた。

「夜に店の開く国なんじゃないの？」

それも考えたが周りの様子ですぐに違うと分かった。

「いや、違うね。むしろこの国の人たちは夜はあまり外にでないみたいだ」

「何でわかるのさ」

自分の答えを否定されて少し口調がきつくなっている妖斬に説明口調で話しかけてやった。

「周りを良く見てみな、夜に外出するなら暗闇は危ないだろ？」

相手は刀のため見えているかはよく分からないが妖斬が「あつ」と声をもらったのが合図になった。

「分かるかな？そうこの通りには住宅の玄関以外に街がほとんど無いんだよ」

「なるほど、じゃあ人を探しに行くの？」

少し考えながら紺色のコートを脱いだ。そしてそれを妖斬の隣にあ

るバッグにしまいながら呟いた

「まずは…ご飯かな？」

腹部をさすりながら苦笑いした顔で言った。

「…まあ、良いんじゃない？」

妖斬の声は呆れていた。

バイクを外壁沿いに大通りをしばらく走らせたが、思った通りに小さい国だ。

門番から渡された地図によれば今居るのは住宅街のようだ。ちょうど此処は城門の反対側らしいが此処まで来るのに20分ほどしかかかっていない、バイクでこの時間だ、歩いても1時間かからないだろう。

しかし私はそんなことよりも今は目の前の光景に圧倒されている。

「これは不思議だな……」

「なにに驚いてんの？」

「全部かな……」

開いた口が塞がらなかった。目の前に見えるものそれは【人】だ。今居る住宅街は大通りの半分ほどの道幅しかないのだが、そのさらに半分を簡単に作られたテントのようなものが占領している。

しかもその狭い道を人が波のように流れている、まるでこの国の住民全員がいるのではないかと考えてしまうほどの人数が

「おや？旅のお方かな？」

私達に気付いた老夫婦が話しかけてくれた。

「ここにちは旅人さん、今日来なさったのかな？」

「はい、門の方から？」

「門？あんなところから入ったんですか？」

「はい、いけなかったのでしょうか？」

「いえいえ、そんなことは有りませんぞ、ただあちらは皆あまり使いませんので…」

「使わない？」

「あら、しゃべる刀とはまた不思議ね。」

バイクのサイドカーの刀を見ながら奥さんがいった。

「そりゃどうも」

「それで使わないとは？」

立ち話もなんだから、と老夫婦の家にお邪魔することになった。昼食はそこで済ませた。

木造の小さな一軒家だったが庭もあり二人で暮らすにはちょうど良いくらいだ。案内された応接間も日の光でやさしい空気に包まれていた。

許しをもらって家の中に妖斬を左の腰に差してきた。

「では、話しましょうかね」

「お願いします」

老人は自分用のソファに座り、入れたての紅茶を少し飲んだあと話し始めた。

「この国は二つの国の間に建てられた国でな、東に行けば歩いても5日で国に着くじやろう、その技術力には何度も驚かされつつ、お前さんたちもそこから来たんじやろ？」

「はい」

「正解」

「西に進めば3日で国に着く、そこは作物が豊富でとても豊かな国じゃった。昔からこの国はどちらの国とも貿易をして国は栄えていたんじやが…」

「では何故」

「戦争があつたとか？」

少し息を吐きながらゆっくりと続けた。

「いや、8年前に国王が亡くなったんじや……ああ、あの時は大混乱じゃった」

「此処の外壁はその国王が？」

不意に話しかけた妖斬に反応するように老人は言葉を発した。

「いいや、あれを造ったのは国王の息子じゃ」

「二代目国王だね」

なぜか楽しそうな妖斬を軽くにらみながら話に耳を傾けた。

「その二代目が問題だったんじゃ…、二代目はまだ若かったせいかなにでも怯えていた。」

「それでこの外壁と門を？」

「国王は東の国の技術力に怯え国民に何も言わずに外壁を造った。

しかし国王は 東を恐れるあまり西の国の事を忘れ西側に門を造らなかつた」

「そのためこの国は孤独になった」

妖斬が付け加えるように言った。男はその言葉に小さくうなずいて答えた。

「しかし、それは3年前の話じゃ、今はわしらだけで門を造り西の国とは昔のようにしておるよ、しかし国王はそれをあまり嬉しく思つてはいなようじゃ」

「何で？国が栄えるのは良い事じゃないか？」

「それは勿論そうじゃよ、しかしだな、もし東の国の住人が我々が西とだけ貿易している事が分かつたら……」

「本当に戦争になりかねない？」

妖斬の一言に怒ったように急に身を乗り出し机に手を着いたまま続けた。

「その通り！国王はそれを恐れておる、だからわしらの様な民衆は住宅街に隠れて生活してるんじゃよ」

この話を聞いて謎はほとんど解決した。しかしシンの中で新たな謎が生まれた。それは……

「すまん、つまらない話を長々としてしまつて。」

「貴重なお話をありがとございます。」

「なかなか楽しかつたよ。」

妖斬の言葉にハハハと笑いながら小さな小包をくれた。

「話を聞いてくれたお礼だ、開けてみてください。」

シンは渡された小包を自分の手元に寄せようとしたが、すぐに止めた。

「私達は何もしていません、お昼をご馳走になっただけでなくお土産まで頂いたら私の顔が立ちませんから…」

「いえ、そんな事を言わずに!？」

突然老夫婦はせがむように立ち上がりお土産を渡そうとするが、シンは頑なに断った。

「私はこれで失礼します。それはまた次に来た旅人にでも渡してください。」

「……どうしても行くんじゃない？」

「行つてしまわれるんですね……残念だわ」

深刻な顔をした老夫婦は壁に掛けてあつた額縁をを一枚はずした、その裏には赤いボタンがあり男はそれを強く押した。

次の瞬間老夫婦の家の玄関が勢い良く開き3人の体つきの良い男が入ってきた。二人は鉄の棒、一人は小型のハンドガンを構えてシンを囲んだ。

そう、これが話の中の疑問点の一つだった、東の国を恐れているにもかかわらず何故私達は簡単に入国できたのか？

それは恐らく情報収集だろう、東から来た旅人は此処で捕まり情報を提供しないものは拷問にでも掛けて最悪殺していたんだろう。実際に私が集め情報にこの国は存在しない5年前から…。

「国王の屋敷まで来ていたきたいのですが？」

ハンドガンを構えた男は正面から照準を頭に合わせたまま言葉を発した。

「嫌だ…って言つたら怖い目に遭いますか？」

「それはあなた次第です…!」

その台詞を吐き終わる前に彼の頭に風穴が開き、口を開け閉めしながら目と鼻から赤い液体をこ床に顔を打ち付けた。シンの右手には袖に隠せる程の小さなハンドガンが姿を見せていた。

それに気付いた男二人は慌てて持っていた棒を振り下ろそうとす

るがシンの右手側に居た男の腕は地面へと転がっていた。

シンが妖軒を左の腰から抜くのと同時に刀身を下から切り上げていた。

シンの左側にいた男はシンの後ろから殴りつけようと勢いをつけた途端に彼の右頬に妖斬の柄の部分が食い込んでいた。

「うああああああああ！」

後ろに居た老人が声を上げ小包を投げようとしたが、小包は老人の掌ごと打ちぬかれた。

と同時に横に居た老婆が小包から出た煙を吸い泡を噴き白目を向いて体をビクビクさせながら倒れた。

「やはり毒でしたか……はやく病院に行くのが身のためですよ。私はこれで失礼します。」

妖斬をしまいながら玄関を飛び出すとバイクにまたがりエンジンをかけた。

その音に気付いた国の住人が一斉にこちらを向いた、しかしその視線を無視しながらバイクのセンタースタンドを蹴り外し指をブレーキから離すと同時アクセルを前回まで捻る、だんだんと迫ってくる住民を横目に国の中心へとバイクを走らせた。

国の中心は国王の屋敷になっている、そしてその横には国の水を管理するシステムがありその中に外へ続く配管があると東の国から聞いていた。

なにしろその設備は東の国の技術だからだ、そして今回危険を冒してもこの国に來た理由もまた東の国の以来なのだ。

「本当に言ったとおり造ってあるんだな」

わずかにパイプの底に溜まった水をバシャバシャとさせながら話しかけたシンに妖斬は楽しそうに答えた。

「入るより出るほうがてこずったね」

「ああ、多分あの国の住人はああやって旅人を捕まえてお金を稼いでるんだよ」

「なるほどね、欲望って怖いね」

「ああ、あんなに小さな国でもあれだけ大きな欲望を隠し持っているんだ、欲望は人をあそこまで醜くさせる」

「シンはそうならないよね？」

「さあ、それは分からないよ、どこまで行っても僕も人だからね」

「じゃあ気をつけてね」

おどけて言う妖斬におどけて返した。

「はいはい、お互いにね？」

「うん、お互いにね」

ははっと笑って見せたが今考え直すとかなりあの状況は危なかった。

「最悪あの毒のガスを浴びさせてそのまま渡すつもりだったんだろ
うけどあの小包はあの大きさにしては何十にも紙が巻かれていたか
ら気付いたけど……」

「もしかして、あのおばあさんのこと考えてる？」

「いや、考えるのは止めよう、後悔しか残らないからね、ほらやっ
と外だよ」

私の名前はシン訳があって生まれた国を捨て放浪の旅に出ている。

これからどれだけの国を回るのかは分からない、それでも私は旅を
続けるだろう、何かを求めて…

END

（後書き）

私の作品はどでしたか？

今回の作品で重視したことは疑問点の解消です。

これを思いついたのはあるテレビドラマを見ていたときでした、まさにこのストーリーの展開に近いもので、初めにあった謎が解消されると人は喜びを感じるのだとわかりました。皆さんが私と同じ感覚になったかは分かりませんが、少しでも喜んでいただけたなら幸いです。

ご閲覧ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9791n/>

シンの旅日記

2010年10月31日09時50分発行